

まはどなたでしようか。」とたずねると、「私は、太郎兵衛山に住む太郎兵衛という  
ものです。あなたさまには、何度もおあいいたしました。何のあいさつもしません  
で、大変失礼いたしました。じつは、私が妙見山のふもとの庵太郎の息子のところへ  
墓地石に住むおよしの娘を世話をし、今日は、小樽入れで祝儀の日取りをきめるため  
に、墓地石に行くのです。庵太郎さんから連らくがいくとおもいますが、祝儀にはぜ  
ひおいでを願います。」といわれました。

おっつけ、庵太郎から祝儀にきてくれるようにと使いの者がきて、長兵衛は、その  
日を指おろかぞえ、祝儀に大喜びででかけました。そして、長兵衛が行くと、ちよう  
ど花よめが馬でのりこんだところでした。庵太郎の家は、たいそうりっぱなつくりで  
ざしき中にま新しいたたみがしきつめられ、客人がおうぜいよばれてあつまっています  
した。そして、だれ一人として知った顔のない客人の中で、長兵衛は、ご指南役で三  
つ紋付きのはおりはかまのよくにあう、太郎兵衛をさげしきの床柱の前にみつけると  
なぜか大変安心し、夜のふけるのもわすれ深夜まで、山海の珍味と酒をたらふくごち